

有珠山噴火速報

松木 敬*

1. 有珠山噴火の経緯

有珠山は渡島半島の噴火湾北岸に位置し、17世紀以降7回の大規模噴火を記録している国内でも有数の活火山である。昭和52年の噴火以来静穏を保っていたが、平成12年3月27日より山体直下を震源とする火山性地震が多発し始め、山体に断層・亀裂が形成されるなどの地殻変動も顕著になった。そして3月31日午後1時8分に有珠山西麓において噴火活動を開始した。

その後も活発な活動を継続し、金比羅山西側斜面に噴火口を形成、西山西山麓と複数の火口から噴煙を上げている。特に金比羅山西斜面は、西山川流域の最下流部にあたり、ここでの噴火活動の影響によって斜面に設置された治山施設が被災し、さらに渓流部に建設されている砂防施設にも土砂が堆積している。また火口からは火山灰や火山弾だけでなく、熱泥水を噴出しており、扇状地内の流路工を流下し

これを閉塞して、洞爺湖温泉の市街地に広がって、残された建物への被害も懸念される。

有珠山では噴火のたびに土砂移動に起因する災害が発生しており、前回噴火時にも山体周辺のほとんどの溪流で二次泥流（土石流）が発生した。今回の噴火活動によっても同様の二次泥流の発生が懸念されているが、さらに地殻変動の影響による土砂生産場の変化による土砂流出状況の変貌をも考慮する必要がある。

2. 土砂災害対策専門家チームによる調査

平成12年3月31日午後1時10分頃の最初の噴火活動を受けて、建設省、北海道開発局、北海道等は、火山泥流、土石流の発生危険度を的確に把握し、関係各所に情報提供することを目的として、「有珠山土砂災害対策専門家チーム」を構成した。翌4月1日より現地にメンバーを派遣して調査にあたっている。

専門家チームの当面の主な活動内容は、建設省防災ヘリコプター「あおぞら号」を活用した斜面の火山灰体積状況、砂防施設の状況、主要河川の堆砂状況の把握と、立ち入り禁止区域外における火山灰堆積深の調査、土石流に対する避難先の安全性の検討、等である。

調査結果はチームレポートとして適宜発表されている。また、ホームページに写真とチームレポートが公表されている(<http://www.mr.hda.go.jp/usudata/dosha.htm>)。

当センターのプロジェクトチームおよび有珠山土砂災害対策専門家チームへの派遣状況は、表（18頁）のとおりである。



写真-1 最初の噴火の噴煙（3月31日撮影）

*（財）砂防・地すべり技術センター砂防技術研究所

3. 今後の活動予定

今後、専門家チームでは、熱泥水、二次泥流発生危険度を把握するために、引き続き有珠山周辺の火山灰堆積深の測定、及び、ヘリコプターからの目視観測、ビデオ画像の解析等を継続する。特に、西山川、板谷川等、二次泥流発生の危険性の高い河川流域ではより詳細な調査が必要となるため、様々なリモートセンシング手法の利用を検討する予定である。また、西山川等での土砂流出による被害を最小限にとどめるための無人化施工技術の適用性についても基礎的な検討を行う。

最後に、今回の噴火に伴い今後予想される土砂災害に迅速かつ的確に対応するため、北海道、北海道開発局、建設省及び林野庁は、「有珠山土砂災害検討委員会」（委員長＝北海道大学教授新谷融氏）を設置することとした。委員会では、今後の有珠山の火山活動の推移を見守りながら、①緊急的に実施すべき対策とその技術的検討を行うとともに、②降灰分布、地殻変動等の状況を踏まえた砂防・治山計画の見直し、③警戒・避難基準雨量の見直し等を検討していく予定である。



写真-2 金比羅山火山口から湯気を出してあふれ出る熱泥水（4月7日撮影）



写真-3 西山西火山口群と国道230号線（洞爺湖側より、4月28日撮影）

表 (財)砂防・地すべり技術センター有珠山噴火対策プロジェクトチームおよび派遣者

総括	保科幸二（理事・技術研究所長）	
リーダー	安養寺信夫（砂防部技術課長）	
サブリーダー	菊井稔宏（総合防災部技術課長）	
メンバー	嶋 大尚（技術研究所技師）、松木 敬（技術研究所技師）	
専門家チーム	企画部	比留間雅紀、酒井敦章
派遣者**	砂防部	安養寺信夫、向井啓司、栢木敏仁、二宮忠之、吉田聡司
	総合防災部	菊井稔宏、小野弘道
	技術研究所	松木 敬

（**平成12年5月16日現在）